

2018 年 10 月 14 日（日）「しもべとしてのリーダーシップ」

マタイ 20:17-28（その 2）

17 さて、イエスは、エルサレムに上ろうとしておられたが、十二弟子だけを呼んで、道々彼らに話された。18 「さあ、これから、わたしたちはエルサレムに向かって行きます。人の子は、祭司長、律法学者たちに引き渡されるのです。彼らは人の子を死刑に定めます。19 そして、あざけり、むち打ち、十字架につけるため、異邦人に引き渡します。しかし、人の子は三日目によみがえります。」

20 そのとき、ゼベダイの子たちの母が、子どもたちといっしょにイエスのもとに来て、ひれ伏して、お願いがありますと言った。21 イエスが彼女に、「どんな願いですか」と言われると、彼女は言った。「私のこのふたりの息子が、あなたの御国で、ひとりあなたの右に、ひとりは左にすわれるようにおことばを下さい。」22 けれども、イエスは答えて言われた。「あなたがたは自分が何を求めているのか、わかっていないのです。わたしが飲もうとしている杯を飲むことができますか。」彼らは「できます」と言った。23 イエスは言われた。「あなたがたはわたしの杯を飲みはします。しかし、わたしの右と左にすわることは、このわたしの許すことではなく、わたしの父によってそれに備えられた人々があるのです。」

24 このことを聞いたほかの十人は、このふたりの兄弟のことで腹を立てた。25 そこで、イエスは彼らと呼ばい寄せて、言われた。「あなたがたも知っているとおり、異邦人の支配者たちは彼らを支配し、偉い人たちは彼らの上に権力をふるいます。26 あなたがたの間では、そうではありません。あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。27 あなたがたの間で人の先に立ちたいと思う者は、あなたがたのしもべになりなさい。28 人の子が来たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためであるのと同じです。」

【序論】

前回に引き続き 20:17-28 を朗読していただきましたが、今日は 24-28 節をメインに扱います。ここには「人の先に立つ」というテーマが中心に置かれているでしょう。どんなコミュニティにも先頭に立つ人がいて、その群全体の責任を負っています（普通はそうでしょう）。取り巻く人々は、リーダーの性質を注意深く見極めているに違いありません。リーダーの責任は重く、時に敬われ、時に批判の対象になることもあります。よって、誰もが群の先頭に立ちたいと思う訳ではありません。旧約聖書にも、モーセ、ギデオン、エレミヤなどが、その役職の重さに恐れ慄いている姿が見られます。

- ・ すると申し上げた。「ああ主よ。どうかほかの人を遣わしてください。」（出 4:13）
- ・ ギデオンは言った。「ああ、主よ。私にどのようにしてイスラエルを救うことができますよう。ご存じのように、私の分団はマナセのうちで最も弱く、私は父の家で一番若いのです。」（士師 6:15）
- ・ そこで、私は言った。「ああ、神、主よ。ご覧のとおり、私はまだ若くて、どう語っていいかわかりません。」（エレミヤ 1:6）

今日は神がリーダーに求めておられる本質を学んでいきたいと思います。

【本論】

主イエスの弟子たちは、来たるべき神の国で、何としてもトップの座に就きたいと考えていました。家族を抱き込んだ熾烈な競争が共同体の中で渦巻いていた。そして、その中でとりわけ重要視されていたヤコブとヨハネ兄弟が母親と一緒に主の許へ行き、右大臣と左大臣の地位を願い求めたのでした。

本論 1. 先に立ちたい弟子たち

このことを聞いたほかの十人は、このふたりの兄弟のことで腹を立てた。（20:24）

この反応を見れば、他の弟子たちの心にも同じ願望があったことが分かるでしょう。ヤコブとヨハネがやったことは「抜け駆け」にほかならなかったのです。特に、ヨハネは最年少でしたから、生意気と言われても仕方ありません。この^いがみ合いを知った主イエスは、十二弟子全員を集め、先に立つ者のあり方を教え給います。

そこで、イエスは彼らを呼び寄せて、言われた。「あなたがたも知っているとおりに、異邦人の支配者たちは彼らを支配し、偉い人たちは彼らの上に権力をふるいます。」（20:25）

「異邦人」という表現が使われていますが、これは世の中全般のあり方のことを言っているでしょう。この世の原理では、基本的に権力や経済力によって支配構造が出来上がっています。子どもの社会ですら、年長の者、腕力の強い者が自然と上に立つようになっていく。政治家は権力を傘に暴政を行ない、人民を無理やり服従させます。法律が定められてしまうと、国民は太刀打ちできなくなるのです。

主の弟子たちもまた、トップの座に就いた暁には、思いのままに振る舞えると思っていたのでしょうか。復興したダビデ王国を支配し、富が一箇所に集まり、諸国民が平服する姿を夢見ていたのか。しかし、主イエスが描いておられた神の国の原理とは、そういうものではありませんでした。

本論 2. 先に立つことは責任を負うこと

あなたがたの間では、そうではありません。あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。(20:26)

キリストの共同体では、上の立場にある者ほど低くなれと言われます。主はここで「偉くなりたい」という願望自体を否定しているわけではありません。そう思うことは構わないし、むしろリーダーはいなくてはならない。しかし、そのリーダーのあり方とは、この世における「偉さ」とは正反対であり、へりくだって、下の立場の者に仕えることなのだ。

私たちは時に、群のリーダーに立ちたがる人を煙たがるかも知れません。もちろん、その願望が露骨に現れている時、嫌悪感を覚える人が出るのは致し方ないことでしょう。しかし、リーダーというのはそもそも誰もがなりたい役回りではないはずです。それは、リーダーにはそれなりの責任が問われ、人に評価され、様々な能力が求められるからです。群が間違った方向に進んでいる場合、やはり最終責任はリーダーに行くでしょう。ですから、そのような立場を進んで買って出る人を、私たちは蔑んではならないと思います。彼／彼女がその責任を全うできるよう、祈る必要があるのです。

主イエスご自身もまた、自ら進んで群のリーダーに立たれました。そして、弟子たちからはなかなか理解されなかったとしても、神に託された道を教え続けなくてはなりません。それは、神の国ではへりくだる者ほど高められるという真理です。人に仕えれば仕えるほど、その人は神の国にふさわしい者とされていく。

あなたがたの間で人の先に立ちたいと思う者は、あなたがたのしもべになりなさい。

(20:27)

ここでは「しもべ」という主イエスの弟子の究極のあり方が描かれます。これは、言い換えれば「奴隷」であり、古代社会においてはこれより低い身分は存在しませんでした。

私たちには「奴隷」という言葉の重みがそこまで現実味をもって迫ってこないかも知れませんが、低賃金での強制労働は現代でも世界各地で問題となっています。某国の超高層ビルの建設に当たっている労働者は、借金返済のために仕事を探しに来た移民がほとんどだそうです。ところが蓋を開けてみると、彼らは契約した賃金の半額しかもらえず、中には半年以上無給で、食料も自腹を切らないといけない人もいます。パスポートは没収され、劣悪な環境での生活を強いられる。8人組で倉庫のような小屋に住み、45人が一つのシャワーを使い、調理器具がないので焚き火で調理をしているそうです。現代にもそのような生活を強いられている人々がいることを、私たちは知らなくてはなら

ないでしょう¹。

主イエスの時代の「奴隷」は、これと同じではありませんが、自分の自由というものはなく、ただ主人のためだけに生存を許されているという意味においては、共通項があります。つまり、「しもべになる」とは、自分の権利を捨てて隣人に仕えることを意味するのです。

本論 3. 先に立つ者のあり方

人の子が来たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためであるのと同じです。」

(20:28)

これこそ福音の原点であり頂点。主イエスは神の子でありながら、すべての人に仕える道を探ってくださいました。その仕える姿は、弟子たちの足を洗われた具体的な行為によって示されてもいます（ヨハネ 13 章）。そして、人に仕え尽くしたところにゴルゴタの十字架がありました。主はそこで「**多くの人のための、贖いの代価**」となりました。「贖いの代価」とは「身代金」とも訳される言葉ですが、これは奴隷を買い戻すために支払う代金のことで、現代で言えば誘拐やハイジャックなどの身代金要求などからイメージできるかも知れません。大切な人を取り戻すために高い代価を支払う。主イエスは私たちを愛し、罪と死から買い戻すために、ご自分の命という代価を支払われたのです。そして、身代わりとなって凄惨な刑罰を受け、鞭で打たれ、十字架に架けられました。これはまさしく奴隷の究極の姿ではないでしょうか。主は奴隷の最果てにまで下り、私たちを神のものとしてくださったのです。

キリスト教会でリーダーに求められるあり方とは、この主に倣うことでなくて何でしょう。この霊的な共同体にあっては、誰よりも低くなった者が神の御前では高められるのです。よって、この世の原理である、腕力、武力、経済力、政治力といった力でもって人を支配することは、あってはなりません。しかし、教会はいつでもそのような危険に晒されていることも忘れてはならないでしょう。ある人には驚くべき賜物が与えられ、霊的権能とか、霊的力というものが具えられることがあります。しかし、その賜物を笠に信徒を従わせようとするなら、そこには既に「この世」の原理が入り込んでいると言えないでしょうか。時に、御言葉を語ることにしておいてさえ、そのような誘惑に晒されることがあり得るのです。

¹ <https://www.youtube.com/watch?v=gCJ5aLlJu0g>

【結論】

私たちが目指すところは、まず「先に立つ者」が主イエスのしもべとなり、信徒のしもべとなることです。そして、その生き方が群全体に浸透し、信徒同士が仕え合うようになることです。そして、仕え合う共同体は、世界に仕え、しもべとして世界の先頭に立っていくことを目指します。私たちが、家族、職場の人々、属しているあらゆるコミュニティの人々に心から仕えていくなら、そこに神の国が前進するのを見るでしょう。

【祈り】

神の子なるイエス様。栄光の君が誰よりも低い者となりました。神の国では、低い者こそが高められるという、この世とは正反対の原理を知り、御名を崇めます。私たちにもそのような生き方をなさしめてください。願わくは、主イエスと同じように、神と人との仕え抜く人生を歩むことができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

全能者にして、人に仕える道を探り、命あるものを顧み給う、父なる神の愛。

神の子の栄光を脱ぎ捨て、誰よりも低い者となり、罪ある者を贖い給うた、主イエス・キリストの恵み。

上に立つ者にこそ、まことのへりくだりを与え、互いに仕え合う共同体を形成させ給う、聖霊の親しき交わりが、

あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。